

経口GLP-1作動薬セマグルチド錠 投与に関する実態調査研究

○山本千尋¹ 中川あや² 巽清³

(1:サン薬局五位堂店 2:サン薬局学園前店 3:(株)関西メディコ)

目的

2020年11月、日本初の内服GLP1作動薬セマグルチド錠が発売され、糖尿病薬物治療の選択肢が1つ増える事になった。セマグルチド錠について、新規処方及び他剤からの切り替え、併用などの処方動向や維持量の推移について分析を行う事で、今後の糖尿病薬物治療に役立てる事を目的とする。

方法

○対象

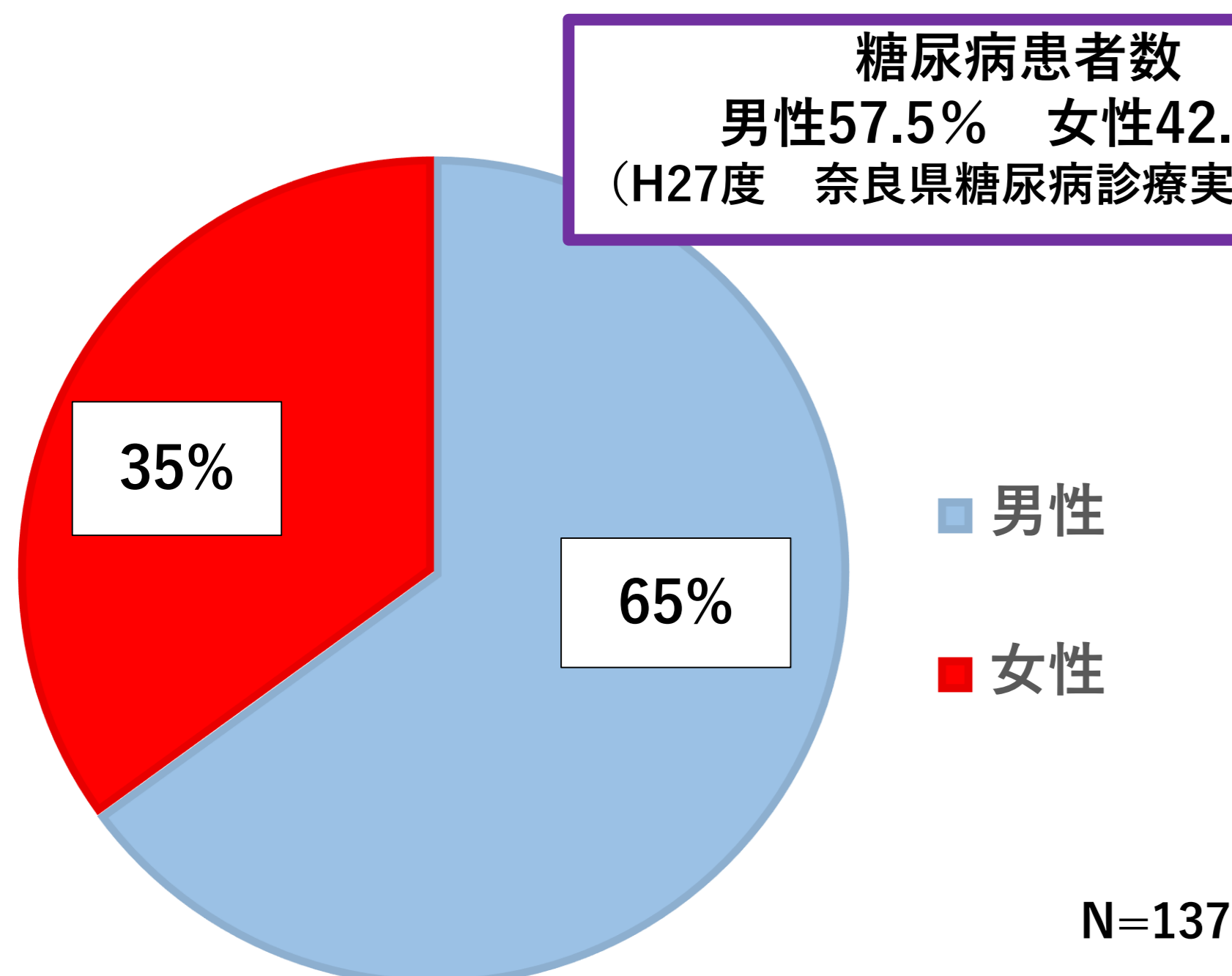
- ・サン薬局全68店舗
- ・期間：2021年12月～2022年4月
- ・症例数：137例

○解析

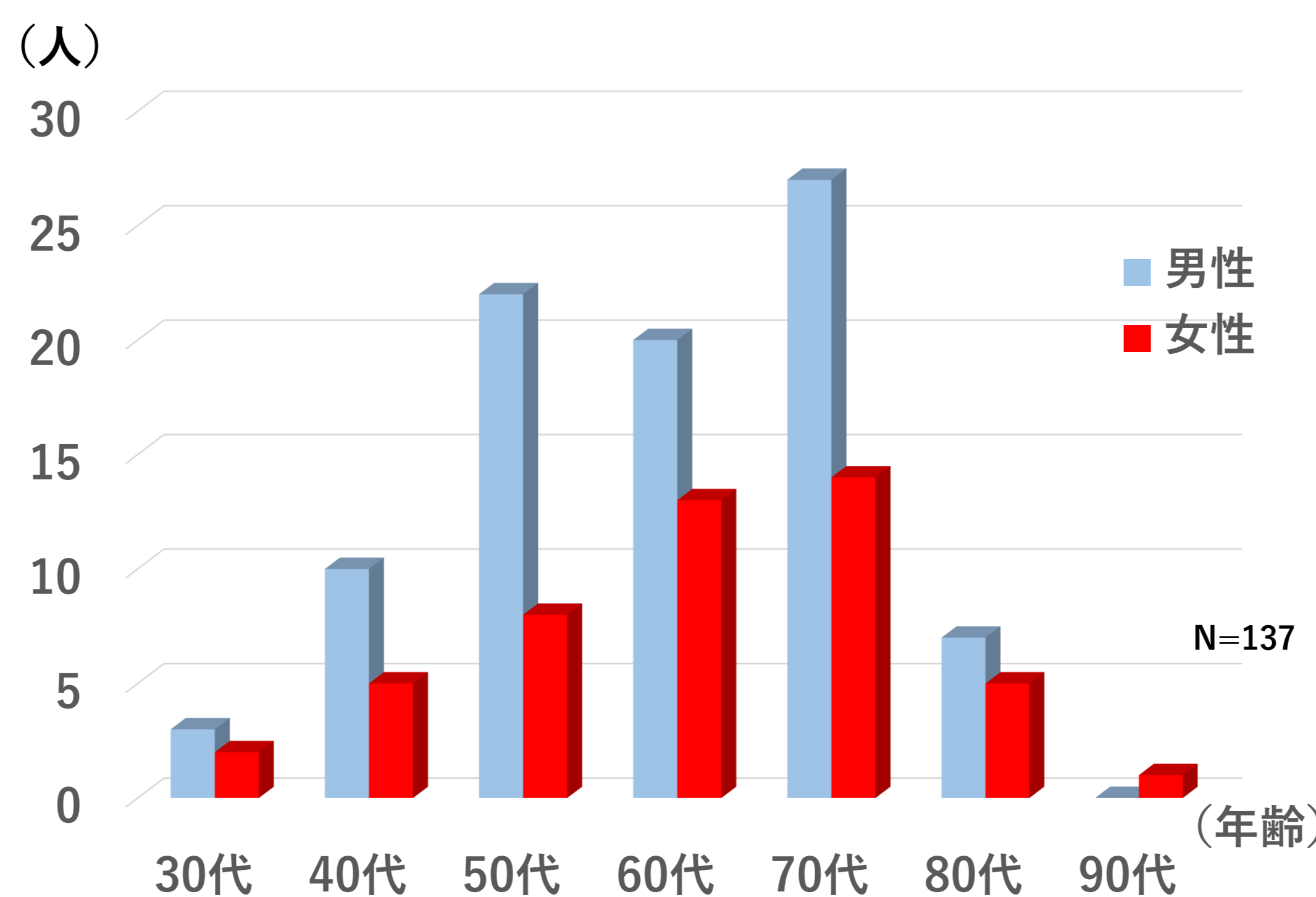
- ・薬歴より下記項目抽出
(年代、性別、処方規格、併用薬、副作用等)

結果

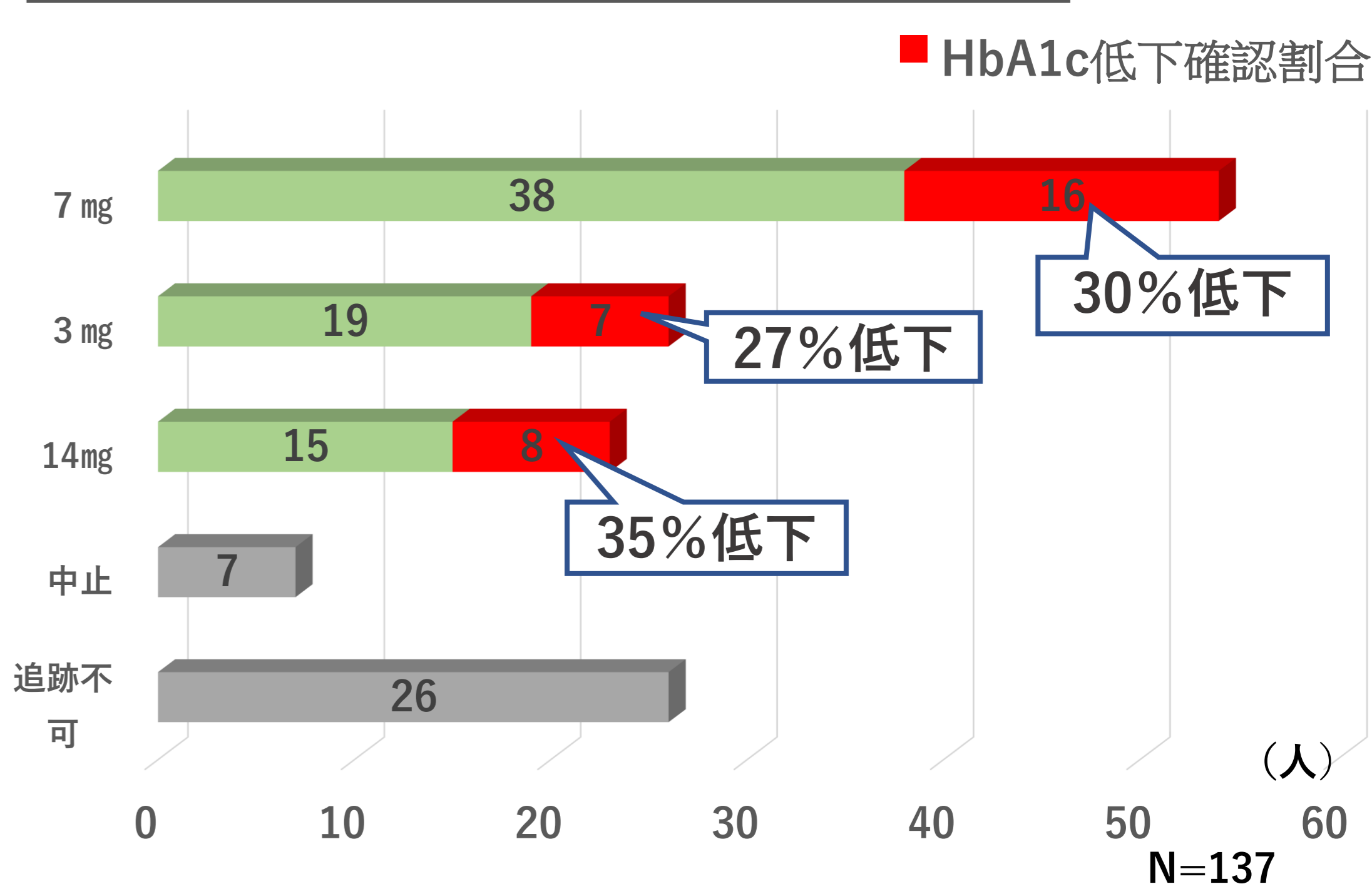
男女別割合



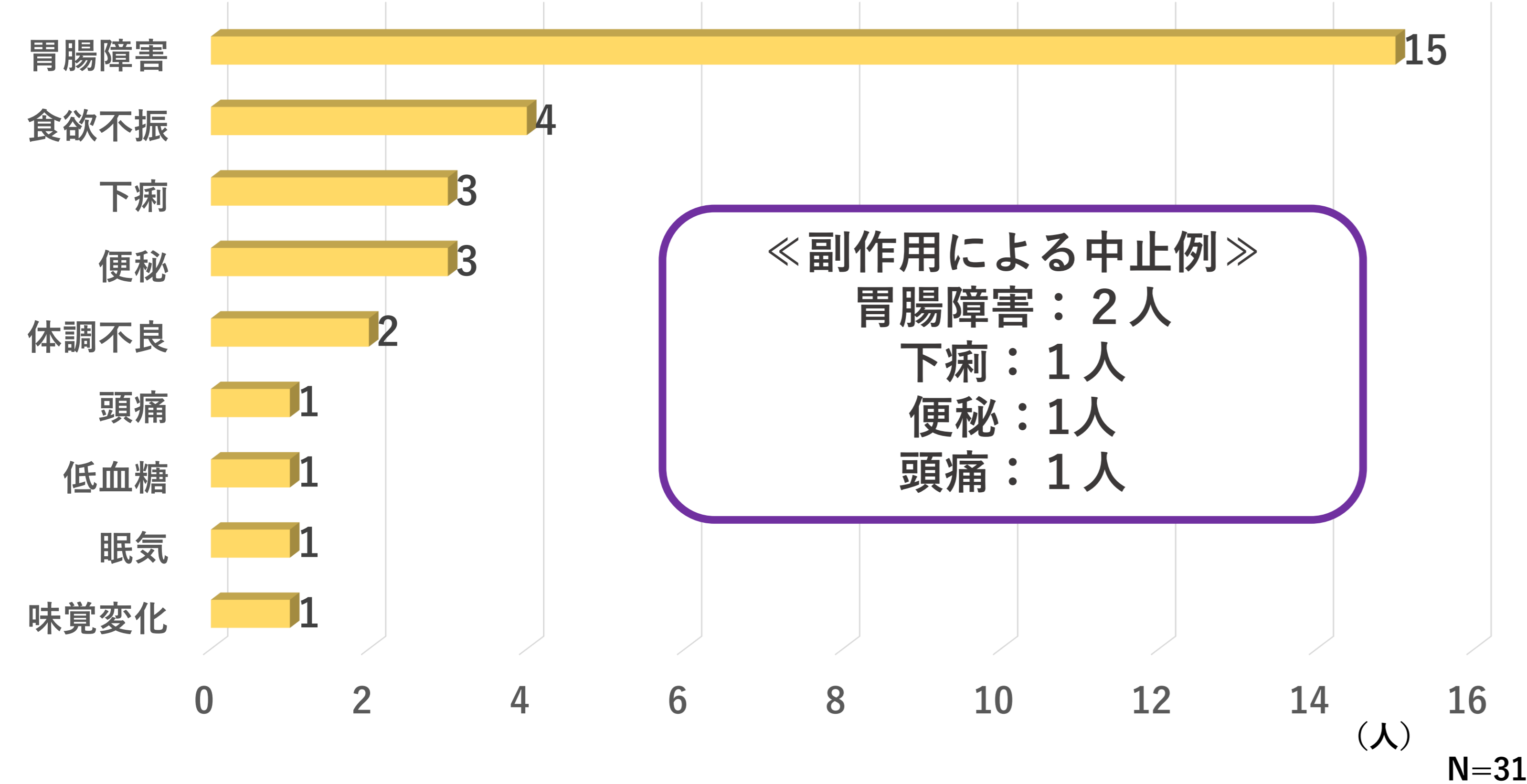
男女別年代割合



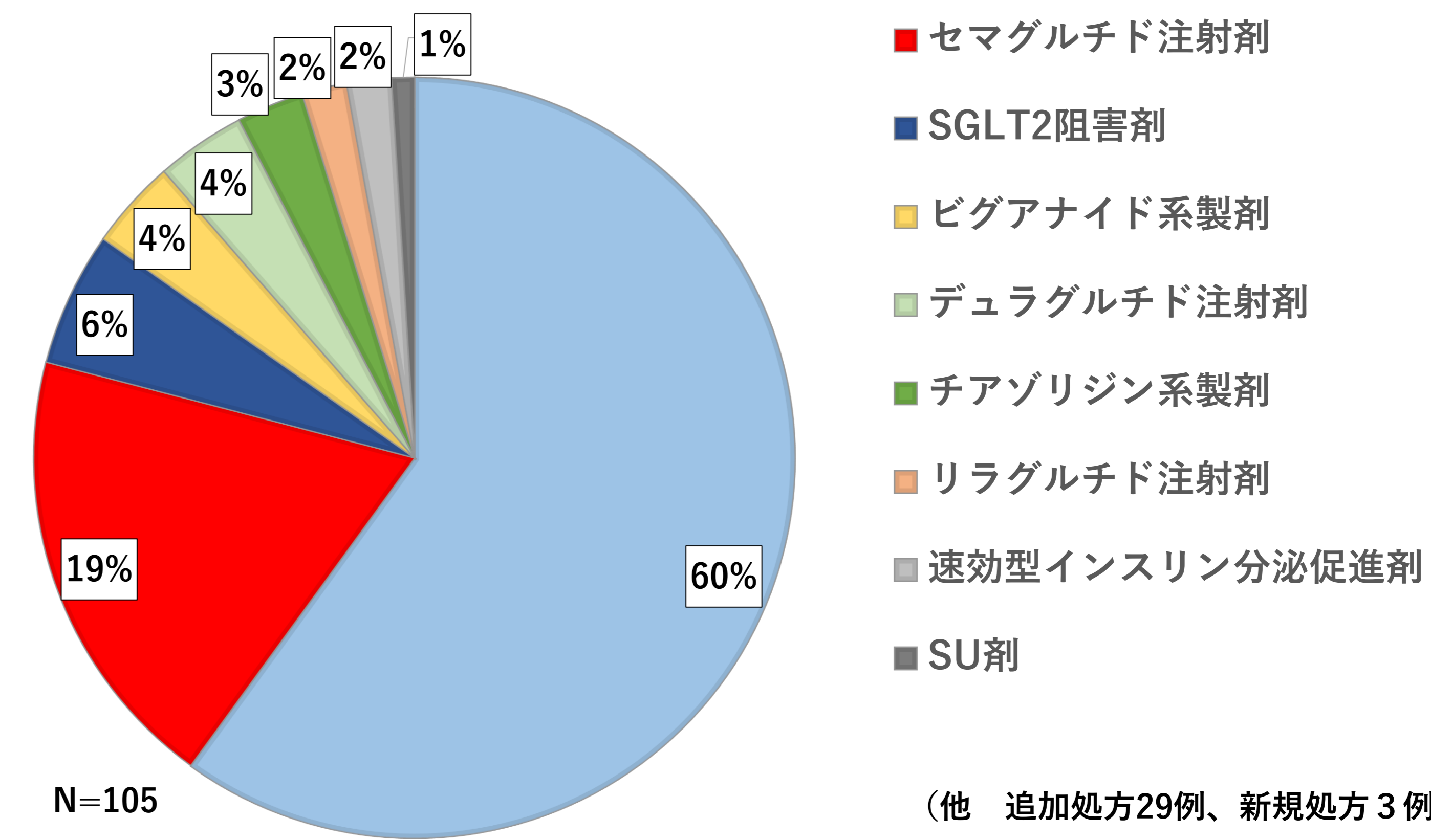
服用規格とHbA1c低下確認割合



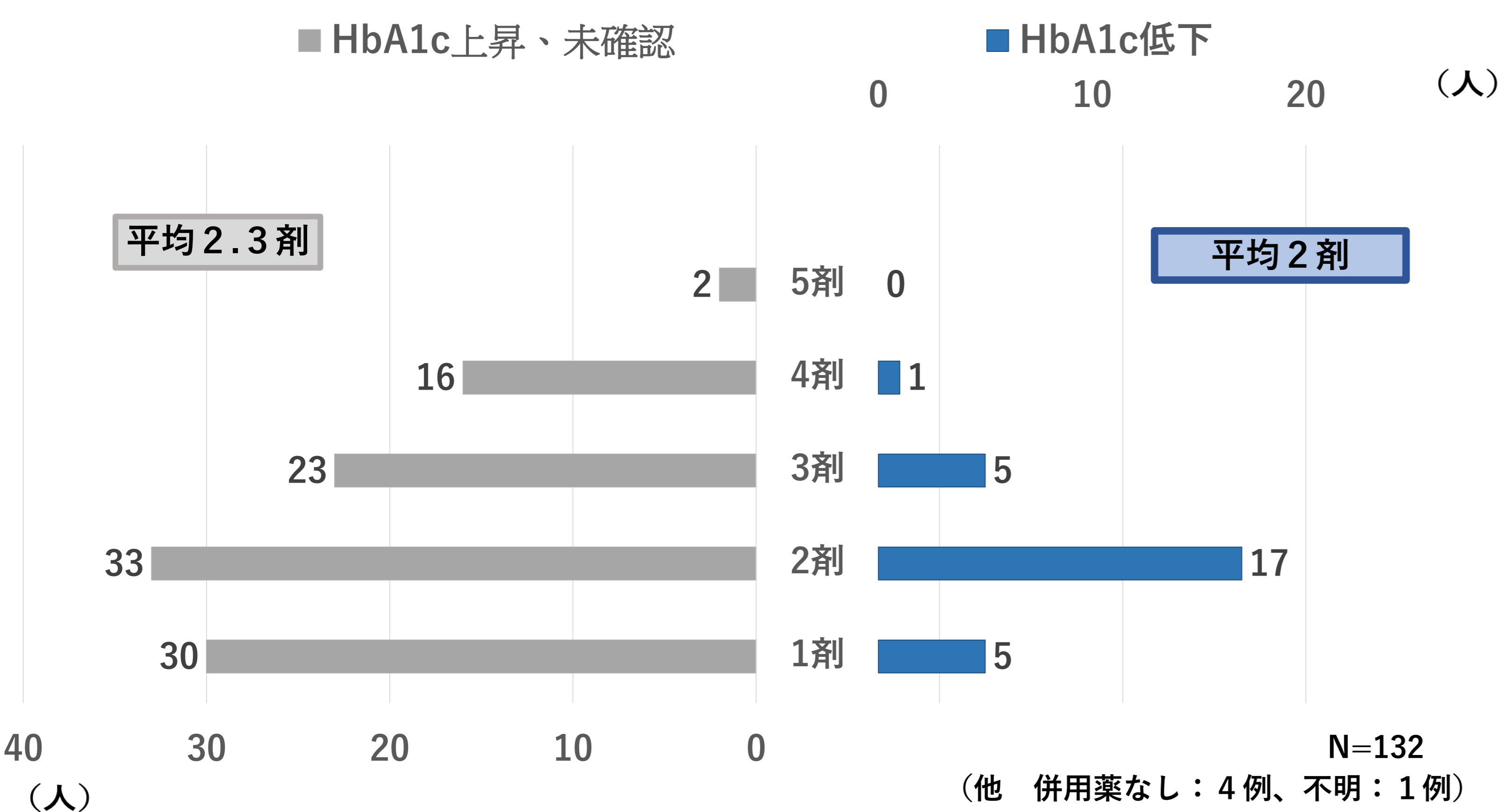
副作用割合



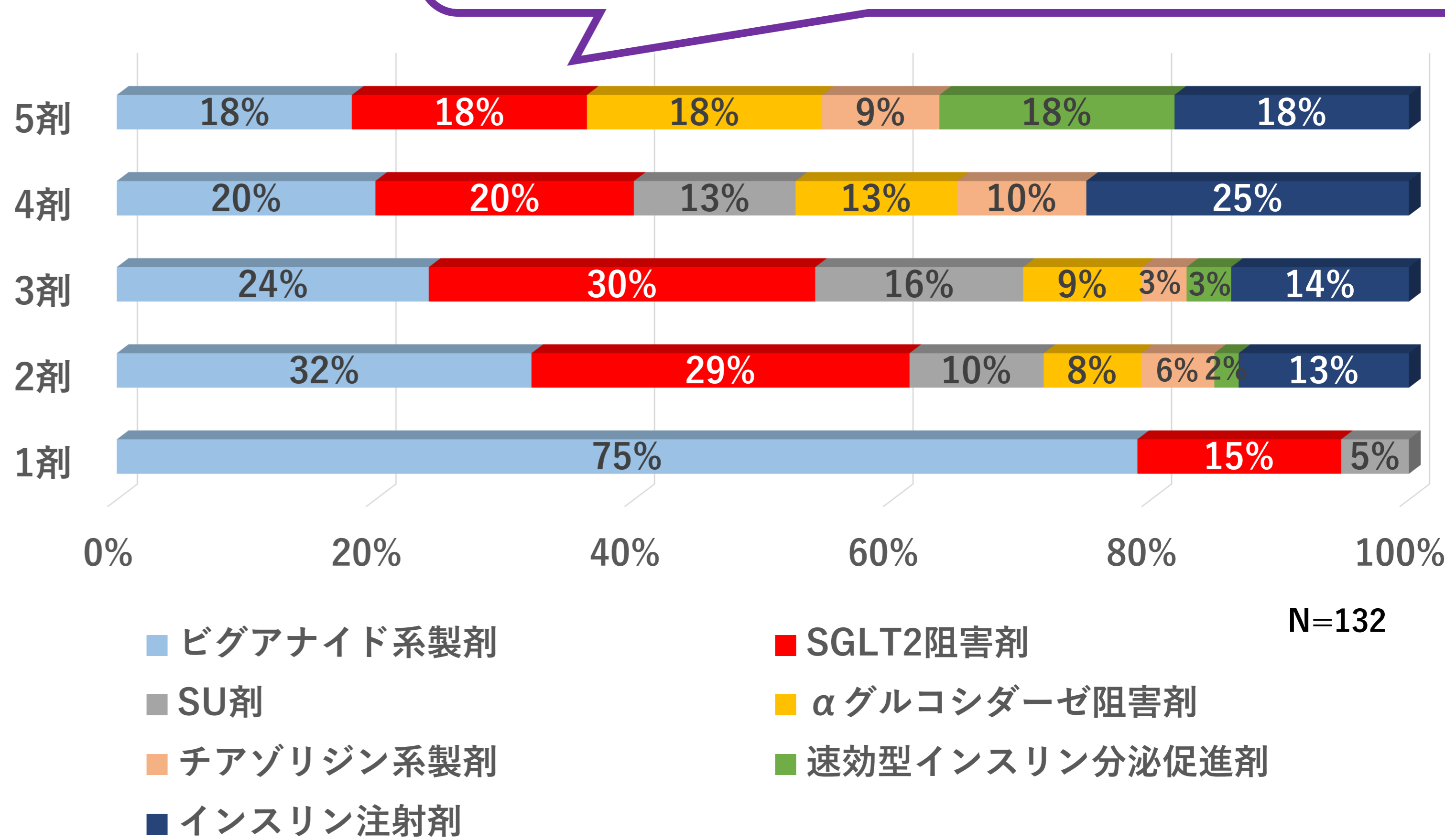
他剤から切り替え割合



併用薬剤数



併用薬の割合



考察

服用方法が特異的であり、80代以上の患者の処方数が少ないことから、高齢者や一包化希望の患者には処方し難い面があると考えられる。副作用発現抑制のため少量の3mgから開始であるが、胃腸障害等により維持量の7mgまで増量不可、または中止等を選択する患者が確認できた。服用時の水分量、服用後の絶食時間により吸収率、副作用発現率が変わるため、投薬時に薬剤師による適切な服用方法の指導、確認が重要である。処方動向において、DPP4製剤からの切り替えが半数以上を占めており、低血糖リスクの軽減に加え、食欲抑制作用を呈するセマグルチド錠による食事面のコントロールが期待されていると考えられる。

調査期間にセマグルチド注射剤の供給低下が生じたことによる切り替え例も確認でき、

また、単剤療法や多剤療法など幅広い治療段階において選択されていることから

需要が高まる傾向にあると考えられる。